

祭りと民俗芸能－東播磨を中心に－

## 都から地方へ

播磨学研究所

小栗栖 健治

---

---

はじめに

1 祭りの歴史

(1) 村の開発

(2) 村の祭り

2 都と地方－祭礼文化の地方伝播－

3 中世郷村の祭礼の記録

4 受け継がれる伝統

(1) 王の舞の系譜－上鴨川住吉神社の秋祭り－

(2) 一ツ物の系譜－曾根天満宮の秋祭り－

5 祭礼文化の地方伝播

6 伝統の変容

おわりに

**資料1 『播磨国風土記』(8世紀の編集)**

○揖保郡伊勢野(現在の姫路市北西部 林田町上伊勢・下伊勢(伊勢明神を祀る))

伊勢野と名づくる所以(ゆえ)は、此(こ)の野に人の家ある毎(ごと)に、静安(こころやす)きことを得(え)ず。ここに、衣縫の猪手(きぬぬいのいて)・漢人の刀良(あやひとのとり)等(ら)が祖(おや)、此処(ここ)に居らむとして、社(やしろ)を山本に立てて敬ひ祭りき。山の岑(みね)に在す神は、伊和の大神のみ子、伊勢都比古命・伊勢都比売命なり。此より以後、家々静安(こころやす)くして、遂に里を成すことを得たり。即伊勢と号く。

**資料2 『養老律令』(8世紀の編集)の「饑制令」(注釈書)「春時祭田条」**

「春の田の祭りには郷の老者(おきな)が集まって郷の飲酒の礼を行い、その酒肴等は公廩(くがい)から供え」ることとして、次の六つのことを記している。

1. 村ごとに社神(神社)が祀られている。
2. 村の神社には私的に社宮を置き、社首(神主)と称した。
3. 春の祈年祭に準じて人夫を集めて祭りを行う。
4. 郷の飲酒の礼を行い、郷家(有力者の家)が酒食を提供する。
5. 田の祭りの日には男女悉く集まり、国家の法を知らせる。
6. 饗応にあたっての準備は弟や子供が行う。

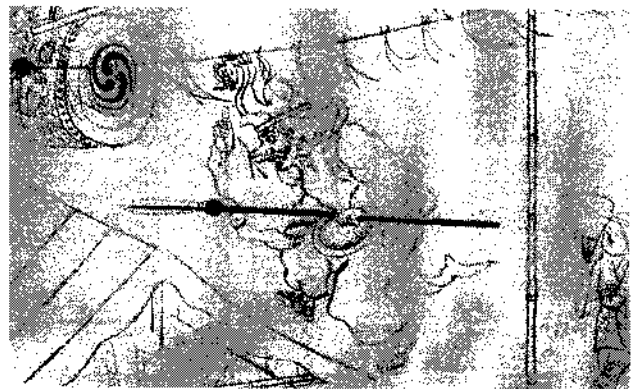
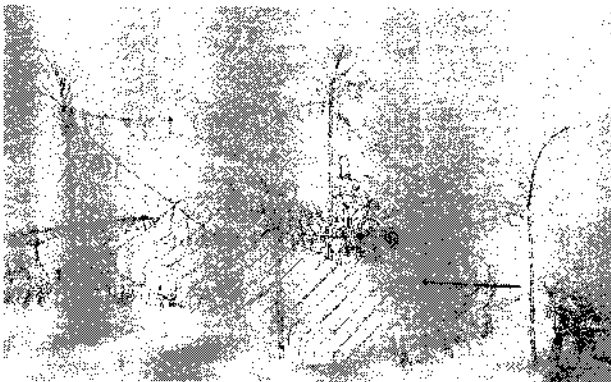
**資料3 『中右記』(右大臣藤原宗忠の日記)長承2年(1183)5月8日条**

今日宇治鎮守明神離宮祭也、(中略)巫女、馬長、一物、田楽、散楽如法、

**資料4 『猪隈関白記』(関白近衛実家の日記)正治元年(1199)5月9日条**

此日新日吉小五月会也、(中略)次王舞、次師子、次田楽、次里神楽、次箭○(布)佐女、六番先上、次■(射之)、次競馬、

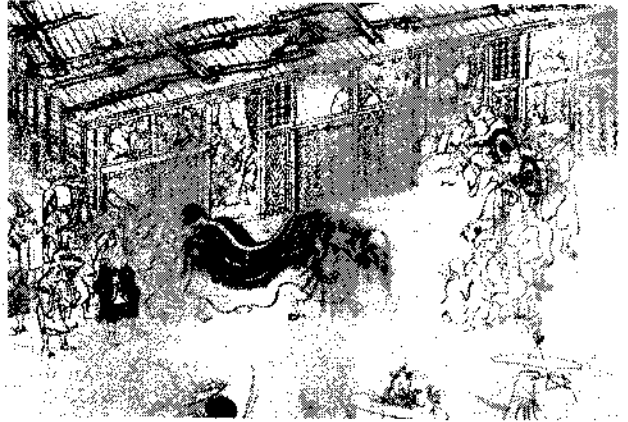
**資料5 王の舞(年中行事絵巻)**



資料6 一ツ物 (年中行事絵巻)



資料7 獅子舞 (年中行事絵巻)



資料8 中世の祭礼行列 (播磨地方)

(1) 松原八幡神社 (「播州飾磨郡松原山八正寺神事軌式之亀鏡写」応永3年: 1396)

①的板 ②御鉢 ③御弓 ④一ツ物 ⑤神輿 ⑥天童 ⑦御立傘 ⑧神馬 ⑨流鏝馬

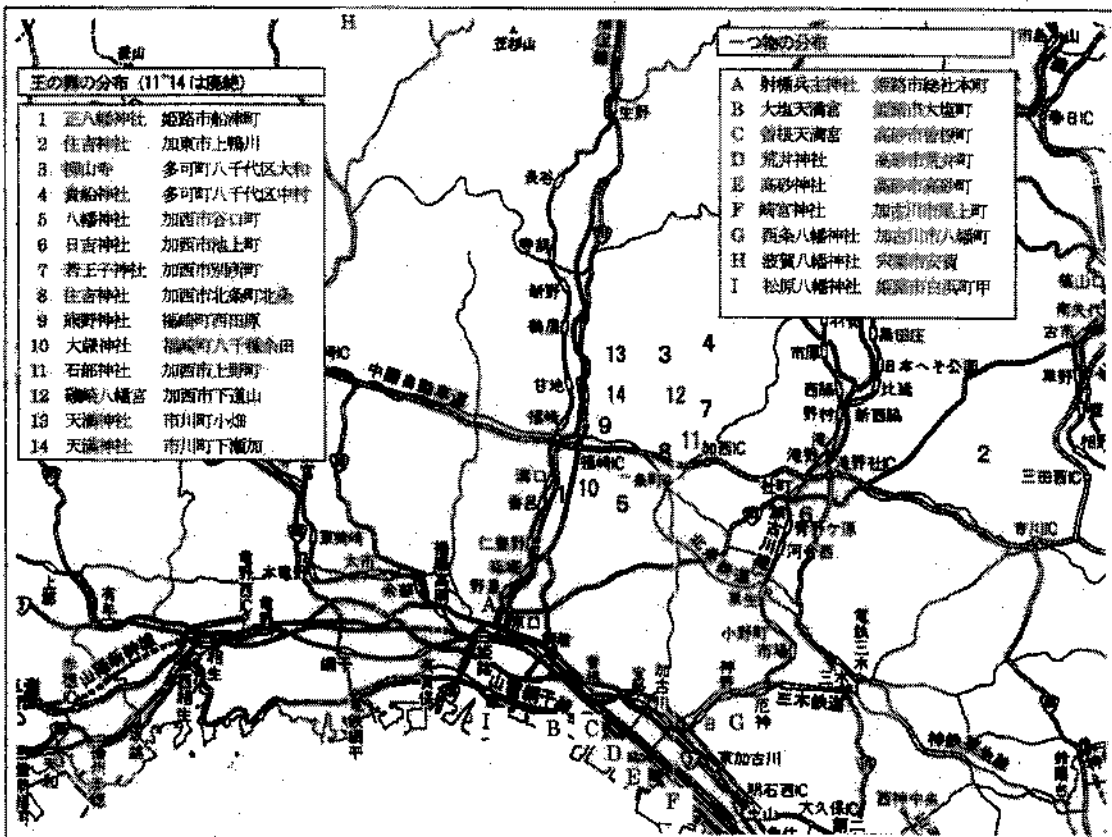
(2) 川述天満神社 (「大宮天神社神事次第」天正7年: 1579)

①巻ツ者 ②神子渡 ③練テノ相撲 ④獅子頭 ⑤田楽舞 ⑥龍音舞 ⑦流鏝馬 ⑧神輿

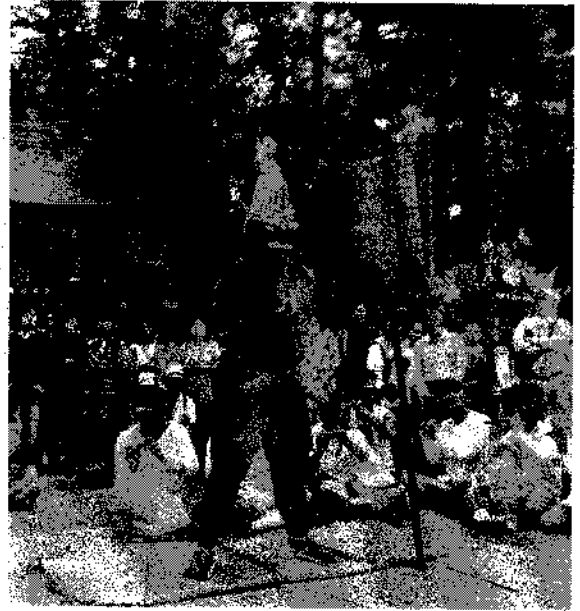
(3) 船津正八幡神社 (「播磨八幡三所宮神事次第相極候写」天正19年: 1591)

①巻ツ者 ②神子渡 ③練テノ相撲 ④獅子頭 ⑤猿楽舞 ⑥龍音舞 ⑦流鏝馬 ⑧神輿

資料9 王の舞と一ツ物の分布



**資料10** 王の舞のすがた



(リオンサンの舞 加東市上鴨川 住吉神社 ) (龍王舞 姫路市船津 正八幡神社)

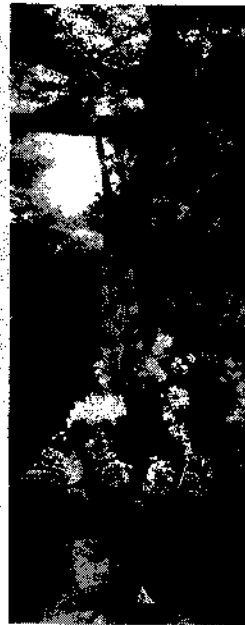
**資料11** 王の舞の呼称 (播磨地方)

①リオンサンの舞、②龍王の舞、③ジョマイジョ、④浄舞、⑤リオンリオン

**資料12** 曾根天満宮の一寸物 (高砂市)



一寸物の宮入り



花笠 (山鳥の尾羽)



尾花 (ススキ旗)

**資料13** 鵜庄祭礼の一寸物の記事 (鵜御庄当時日記 戦国時代 法隆寺文書)

- 一、上宮稗印祭 (略)
- 一、九月八日申刻ニ下宮御輿本堂へ動  
上、則夜宮神楽九時マテ同祭、  
一寸物 笠一、直垂 (ひたたれ) 赤衣、政所在之、笠ノ上ニ花ヲカサル、又薄 (ススキ)

ノ小花廿四・五本取テカミヨリニテ三処結テ、又厚紙一枚ニテ友絵ヲ書テ是ニ指也、  
一物 笠ノ上ニ山鳥ノ尾ヲサスナリ、料足五十文ト数扇一本、一物シタル者ニ引出物  
ニスルナリ、

**資料 1 4 鱸庄祭礼の一寸物（意訳）**

稗田神社の一寸物は笠を被り、赤い直垂を着ていました。笠には上に山鳥の尾羽を立て、花で飾られていました。また、薄（ススキ）の小花（おばな）24・5本を束ね、紙のコヨリで3か所を結び、厚紙に巴の模様を書いて挿していました。

**資料 1 5 崎宮神社のカゲシ（西谷勝也氏撮影）**



上左：昭和12年（1937）  
上右：昭和38年（1963）  
下：昭和38年（1963）

**資料 1 6 崎宮神社の秋祭り（『郷土のおはなしとうた』昭和51年：1976 加古川市教育委員会）**

農家の多い村での一年中が一番大きい楽しい行事は、五穀豊穡を願う氏神様の秋祭りでありました。

崎の宮（養田・池田の氏神）の秋祭りは毎年十月十、十一日に行なわれました。その神事式は古式豊かなものでした。一週間前から祭りに関係する人達は、頭屋に泊って潔斎を行ないます。宵宮には、養田は加古川の川尻で、池田は池田の浜で、「潮ごり」をして身を浄めました。祭礼の主役は「川岸（かげし）」と呼ばれる稚児です。五・六才の男の子がきれいな化粧をして、山鳥の尾羽根を飾った冠をかぶり、狩衣を着て乗馬で道中しました。一か月余りの練習を重ねたシデ振り（十才ー十二才）は、そろえのねるのふ

り袖を着た五人の子供です。神輿かきは、十日余りの神輿ねりのけいこを積み、これもそろえの白いたすきをかけた青年団員です。それらが「木打ち」の合図に従って、一糸乱れず行動をとります。

「ハーラー」の掛声と一しょに地をはうかと思えば、虚空に舞うシデの舞、「千歳楽ヤ万歳楽ヤ」の声に和して左右に振舞わされる神輿、その後に静かに、優雅に馬にまたがった川岸（カゲシ）の姿が続きます。

「秋の田の刈り分け行けば夕涼風に八重垣もそのような八重垣もそのような、川岸の根白の柳あらわれて八重垣もそのような八重垣もそのような」とすみきった秋空にりょうりょうとひびく催馬楽（さいばら）の歌声、黄金の穂波を分けるようにして進む神輿の行列、馬上の華麗な川岸の姿、さながら一幅の絵巻物でした。



資料 1 7 荘園鎮守社（滋賀県大津市）

資料 1 8 波賀八幡神社の一寸物（大栗市）



勧請神（右）と在地の神（左）

(在地神)	(勧請神)
峯神社	十禅師社

**資料19** 獅子頭 (神河町比延区 日吉神社蔵)



(墨書銘)  
播磨国大河内庄山王宮  
獅子也、  
仏子宰相法眼  
惣庄勸進名□  
五十□□  
永享六年八月□日  
神主道慶

**資料20** 獅子頭 (篠山市 春日神社)



**資料21** 中世の系譜を伝えるひと組の祭礼芸能

(1) 曾根天満宮の秋祭り (高砂市曾根町)

- ①一ツ物頭人 ②行事頭人 ③和供頭人 ④馬駆け ⑤流鏝馬 ⑥相撲  
⑥お面掛け

(2) 播磨国総社の一ツ山大祭・三ツ山大祭 (姫路市総社本町)

- ①競馬舞 ②一ツ物 ③神子渡 ④弓鉾指し ⑤流鏝馬 (通称、五種神事)

## 屋台の登場／正月と鬼

播磨学研究所

小栗栖 健治

### 第1部 第2回「屋台の登場」

- 7 風流の変革
- 8 祭礼絵巻と絵馬にみる
- 9 華やかさを競う
- 1.0 「やま」の類型と屋台

おわりに—革新から伝統へ—

### 第2部 「正月と鬼」

はじめに—正月にも先祖の霊が帰ってくる—

- 1 修正会（しゅしょうえ）
- 2 鬼—豊かさの象徴—
  - (1) 鬼追いの宝庫・ひょうご
    - ①円教寺の鬼追い—姫路市—
    - ②鶴林寺の鬼追い—加古川市—
  - (2) 鬼追いの特色
- 3 蓑と笠の神
- 4 正月神の来訪

おわりに



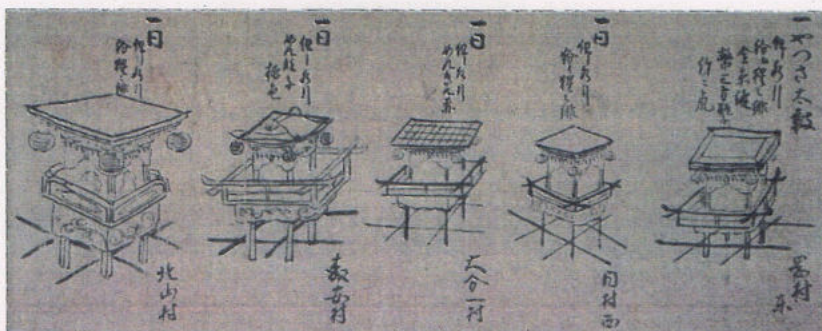
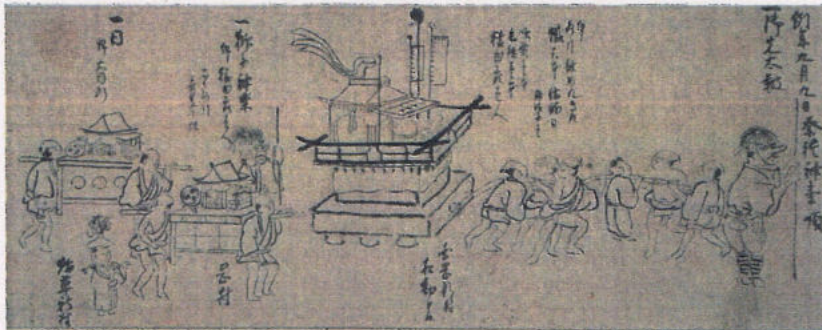
**資料 2 2** 記録に登場する屋台

- ① 恵美酒宮天満神社 享保 2 年 (1717) の祭礼行列に東堀町から「神輿太鼓」が出されていました。
- ② 魚吹八幡神社 氏子の一つ和久村では宝暦元年 (1751) に「屋台」を出していたが、その後中断し、天保 4 年 (1833) に若者の願いにより「神勇」として屋台を再度出すこととした。1750 年頃からあったことが分かる。
- ③ 松原八幡神社 宝暦 8 年 (1758) には「神輿太鼓」という名前で登場している。

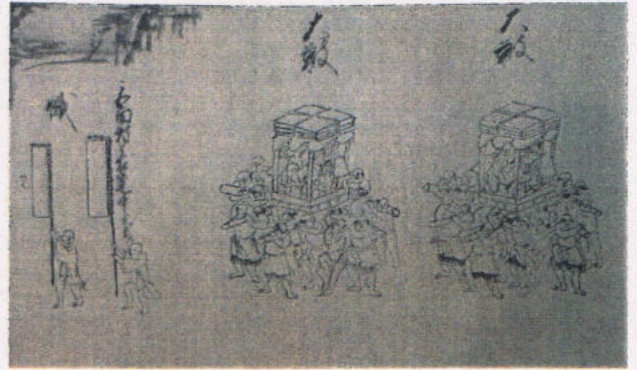
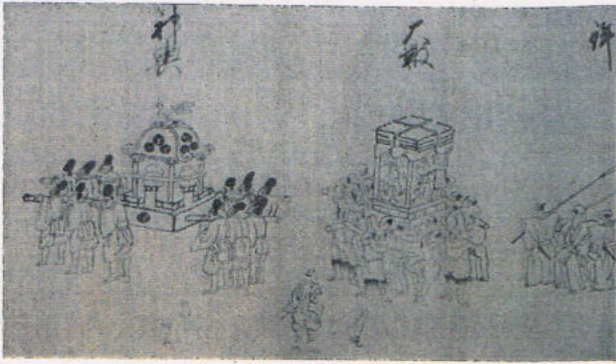
**資料 2 3** 「神吉八幡神社御神事絵図」(文政 3 年: 1820 加古川市)



**資料 2 4** 「国安天満神社祭礼神事順」(19 世紀頃 稲美町)



資料25 「阿閑神社祭礼絵巻」(19世紀 播磨町)



資料26 松原八幡神社祭礼絵巻



現在の屋台



資料27 「上之庄神社祭礼図絵馬」(安政5年:1858 加古川市)



資料28 夏越し祭り(室津 賀茂神社)



資料29 「やま」の形式

1 置山 (播磨国総社 姫路市)

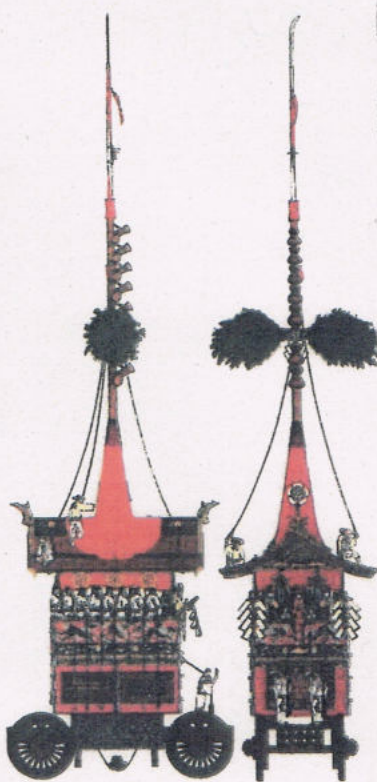


2 曳山・壇尻

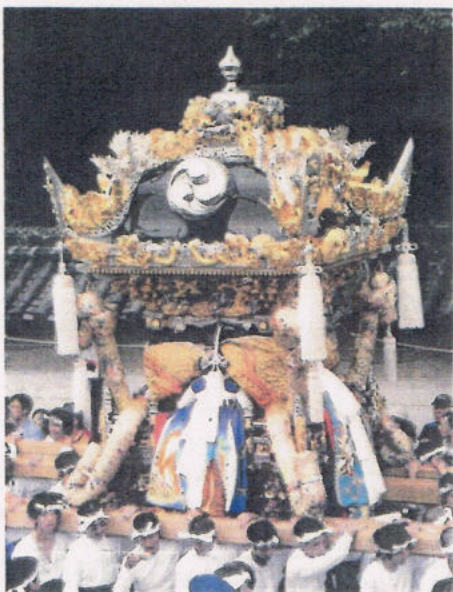


壇尻 (魚吹八幡神社 姫路市)

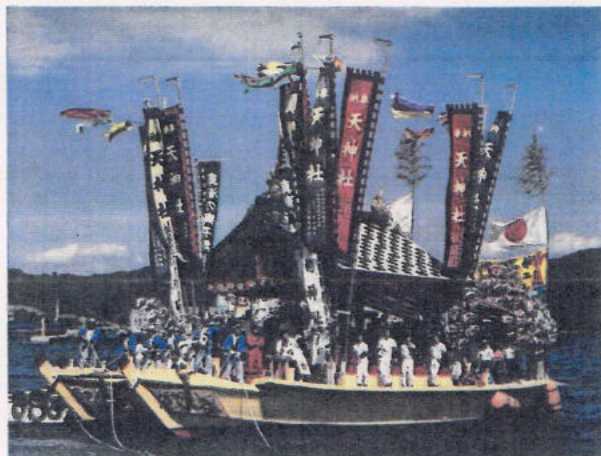
曳山 (八坂神社 京都市)



3 舁山 (魚吹八幡神社 姫路市)



4 壇尻船 (家島 家島神社)



**資料30** 家島神社の天神祭り (姫路市家島町 『兵庫県神社誌』、1936年4月当時の状況を記す)

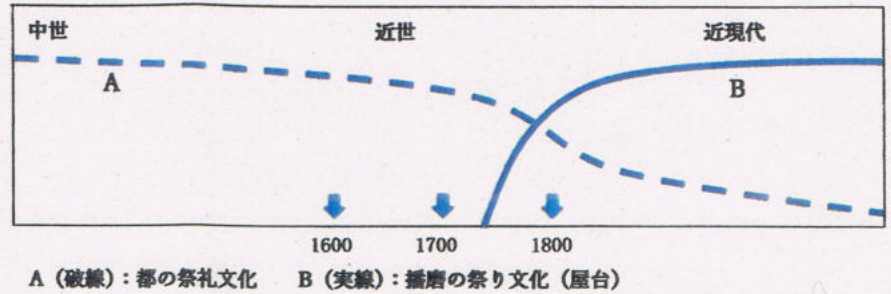
夏祭 六月二十五日。太陰曆

〔神社調書〕 毎年陰曆六月二十四五日兩日に行ふ、以前は松明を點ずるを神事とせしがいつの世にか廢せられ、現今は船臺躡を漕廻り、夜は高張提灯をねり廻り、晝は獅子を舞はすを例とす、

**資料31** 繰り返す伝統と革新

↑	革新	? (新しい風流)
	伝統	地域の象徴
	革新	屋台の登場
	伝統	地方の祭礼として定着
	革新	都の祭礼文化 <small>伝播</small>
	伝統	固有の祭り <small>地元</small>

**資料32** 模式図



**資料33** 『徒然草』 (吉田兼好)

晦日の夜、(中略) 亡き人のくる夜とて魂祭るわざは、この比都にはなきを、東のかたには、なほする事にてありしこそ、あはれなりしか

**資料34** 『三宝絵』 (984) 「修正会」の部

オホヤケハ、七ノ道ノ国々ニ、法師、尼ニ布施ヲタビテ、ツトメテイノラシメ、私ニハモロモロノ寺々ニ、男女ミアカシヲカゝゲテアツマリオコナフ、(中略) 身ノ上ノコトヲ祈リ、年ノ中ノツツシミヲナスニ、寺トシテオコナワヌハナク、人トシテキヨマワラヌハナケレバ、年ノハジメニハ国ノ中ニ善根アマネクミチタリ、

**資料35** 円教寺の修正会 (鬼追い) - 姫路市 -

- ① 1月18日に行われる。    ② 赤鬼と青鬼が出る。
- ③ 本堂と十一面堂を移動する時、鬼は黒い頭巾を被る。
- ④ 本堂の外陣と内陣の仕切格子戸の長押の天井に、梅の花をイメージした造花「鬼の花」が飾られる。
- ⑤ また、長押のところに英賀の才村から奉納された大きな鏡餅が、三つ掛けられる。
- ⑥ 鬼追の終了後、牛玉宝院・鬼箸・鬼花が信者に配られる。

**ポイント** 鬼の花・牛玉宝印・餅・黒い頭巾

○鬼の花



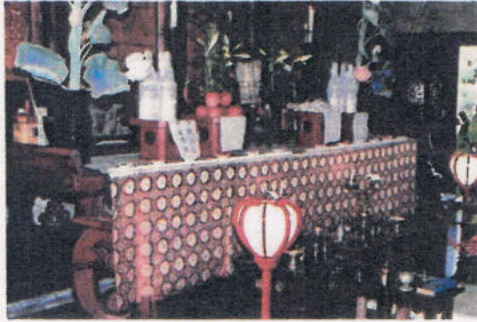
○黒い頭巾を被る鬼



### 資料36 鶴林寺の修正会（鬼追い）－加古川市－

- ① 1月8日に行われる。 ②赤鬼と青鬼が出る。
- ③修正会のときに12の燈明（1年の降雨と日照りを占う）と鬼の花による作物（早生・中生・晩生）の年占いが行われる。
- ④須弥壇に牛玉宝印が奉られている。終了後、宝印を額におしてもらう人がいる。
- ⑤内陣の天井から餅を吊っている。

**ポイント** 鬼の花（豊作の占い）・牛玉宝印・餅・降雨と日照りの占い



晴雨を占う



鬼の花



豊作を占う

### 資料37 謡曲『安田吉道』の「富草」

追儺会の式に、稲穂となそらへ三把拵へ、衆徒三人持給ふ、是は早稲・中稲・晩稲の三把也、此穂を持祈念の中、自然と盛気相顕るゝあり、衰ふ気色見ゆる有、是を以富草の出来不出来を知り、盛気能苗を以、其年の貢をなす、又老人ハ十二の燈をならへ、十二ヶ月に当、油とうしん不同なきよふにして、点し候に、火気盛に成る有、又、衰ふあり、其盛衰を以、月々の晴雨氣候を知る便と成べしとて、近郷の老若群集し、遠処のものハ聞伝て、其年の手当をはなすとかや、

### 資料38 鬼追いの特色

- ①鬼 ②餅 ③花 ④牛玉木と牛玉札 ⑤年占い

### 資料39 ヤマドッサン（淡路市舟木 永田家）

- ①正月九日から十日にかけて行う。ヤマドッサンを行う日はジマツリである。
- ②ヤマドッサンは夫婦の神さんで、九日の夕方、床の間のある部屋の戸を少し開けておくと裏山から入ってくると伝えられている。
- ③ヤマドッサンは座敷で祀られる。その形は農具の鍬に笠を被せ、蓑を着せたもので表される。笠は男の神さんの顔が醜いために、蓑は寒さを防ぐためだと伝えられている。
- ④九日の節句と同様にジノミを作る。ジノミはヤマドッサンをはじめ、玄関に入ったニワ（土間）に祀られているジノカミや種粿、床の間や仏壇、オトッサンや地の神、玄関や背戸、牛小屋や納屋、門松、苗代などにまつる。
- ⑤二十日の早朝、家の当主はヤマドッサンの笠と蓑を身にまとい、白で白餅を搗き「シロミズ」を作る。これを「ツキアゲ」という。当主はシロミズを若水の桶にシロミズを汲み、ジノミをまつた所へ行きシロミズを飛ばす。
- ⑥永田家ではこの行事が終わるとヤマドッサンは山へ帰っていくと伝えられている。
- ⑦別の家では次のように伝えている。この行事が終わると、ヤマドッサンは田んぼに出て働く。穫り入れを終えた秋の十月二十日、ヤマドッサンは家に戻って祭りを受ける。そのまま家に止まり

正月を迎えている家、また、山へ帰り、正月にやってくると伝える家がある。

**ポイント** 永田家のヤマドッサンには、九日の節句（ジノミ）と二十日の節句（ミノ・カサ・臼）の特色が共存している。作神としての性格が強い。



(左) ヤマドッサンの御神体



(右) 当主がヤマドッサンになり、正月を寿ぐ。

#### **資料40** 「笠地藏」の概略

大晦日におじいさんが正月の準備をするために町へ笠を売りに行くが、全く売れない。それで帰り道に、六地藏が雪に埋もれているのを見て雪を払って笠をかぶせて、家に帰る。すると、六地藏が正月の飾りや宝物を持って、正月の朝の明け方（というか夜中）にやってくる。

#### **資料41** 「わらべうた」（高知県）

お正月さま、お正月さま、どこまでござった、ぼんだ山の裾までござった、何よ持ってきた、耳にじくはさんで腰へ羽根板はさんで、ゆずり葉の笠で、山草（裏白の事）の蓑で、赤木の杖でとくとくござった。

#### **資料42** 正月神の乗り物（淡路市中持）

正月に門松を作る松を山へ取りに行くことを「若松を迎えに行く」とか、裏白を取りに行くことを「正月さん（正月に家々を訪れる神）を迎えに行く」という。